

令和6年度第2回 ひきこもり支援協議会 議事録  
 (主要な質疑応答及び結果)

開催日時	令和7年3月25日(火曜日) 午後6時00分～午後8時00分
会場	本庁舎 5階 509・510号室
出席者	<p>【委員】文京学院大学人間学部人間福祉学科 教授 中島 修、                  東京学芸大学教育心理学講座 教授 福井 里江、                  NPO 法人楽の会リーラ理事 (KHJ 全国ひきこもり家族会連合会 KHJ 東東京支部)                  上田 理香、株式会社 Meta Anchor 代表取締役 山田 邦生、                  櫻和メンタルクリニック 院長 山野 かおる、                  池袋市民法律事務所 所長 釜井 英法、                  高齢者総合相談センター(包括) 中央高齢者総合相談センター長 澤口 清明、                  豊島区青少年育成委員会連合会 常任幹事 根岸 幸子、                  豊島区民生委員児童委員協議会 会長 山本 ナミエ、                  小杉 順二、瀧本 裕喜、池袋保健所保健予防課 精神保健係長 漆山 友美子、                  豊島区民社会福祉協議会 共生社会課長 田中 慎吾、                  東京都 福祉局生活福祉部生活支援担当課長 山川 幸宏、                  豊島区 福祉部長 田中 真理子</p> <p>【オブザーバー】NPOインクルージョンセンター東京オレンヂ 三浦辰也、甲斐正大、仲俣実穂</p> <p>【事務局】豊島区 自立促進担当課長事務取扱福祉部長 田中 真理子、                  豊島区 自立促進担当係長 作田 幸子</p>
傍聴者	なし
会議次第	<p>開会</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 挨拶(中島会長)</li> <li>2 孤独・孤立対策 研修報告【資料1】</li> <li>3 ひきこもり支援ハンドブックの策定について【資料2】</li> <li>4 今後の区の広報について【資料3】【資料4】</li> <li>5 各委員からのご意見・情報交換</li> </ol> <p>閉会</p>
資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次第</li> <li>・ 資料1 孤独・孤立対策研修資料</li> <li>・ 資料2 ひきこもり支援ハンドブック～寄り添うための羅針盤～概要</li> <li>・ 資料3 令和6年度ひきこもり相談窓口実績(令和7年2月末日時点)</li> <li>・ 資料4 豊島区ひきこもり情報サイト改善案</li> <li>・ 参考 座席表</li> </ul>

## 主要な会議内容及び質疑応答について

### 開 会

#### 1 挨拶 中島会長

#### 2 孤独・孤立対策 研修報告【資料1】

##### (事務局) 概要について説明

(会長) 孤独・孤立対策を大きな枠組みで進めていきたいという意欲の表れで、これだけの会議体を一緒にやるのはすごいことだ。埼玉県で孤独・孤立プラットフォームの会長をしているが、作り方はだいぶ違うので、そういう意味では豊島区の取り組みは面白い。1月7日に豊島区の管理職に向けて研修をやったが、そういった研修を企画できるのも素晴らしいことだと思う。

(委員) プラットフォームは色々な人が集まる場所だと、都内の他の協議会にも参加して感じている。繋がりを作る上で何が一番大事なのか。プラットフォームができただけで終わってしまう、形骸化しやすい点があると思う。顔の見える関係作りを構築すると資料に書いてはあるが、こういったプラットフォーム作りで豊島区が大事にしている点を改めて伺いたい。

(事務局) 既存の会議体を活用し形骸化を防ぐことを考えている。繋がり作りという部分では各官民連携プラットフォームの会議体として複数挙がっている。既に支援者同士の繋がりや、顔が見える関係を作ろうとしている中で、孤独・孤立対策の担当者が各プラットフォームに入ることにより、情報共有をしていきたい。日常から人と人が繋がるためには福祉分野以外の取り組みも重要になるため、支援者同士で情報共有をしていきたい。これが地域の1つの繋がりだと思っており、広域のプラットフォームを作ることで、より人と人が繋がっていくと考えている。

(委員) まず足を運んで、顔と顔が繋がって、あらゆる情報を共有できる人がいるということは心強い。

(会長) ぜひ既存のプラットフォームを活かしながら、具体的な取り組みが見えるようにしていただきたい。

(副会長) 孤独・孤立は大事なテーマで、ようやくできたが、豊島区の場合は特別に何かを始めるよりは、既に取り組んでいたことがそのまま位置づくことで、先進的にやっていたことが、見える形になって素晴らしい。会議体を作るということは、孤独・孤立状態にある人を見つけ、その人たちを眺めるような立ち位置にややもすればなりかねない。その中で、孤独・孤立は他人事ではなく、自分の心にある弱いところにも触れながら、皆で自分事として考えていくことが大事なのではないか。既存のシステムになかなか当てはまらないような多様な人の姿や多様な価値観を、周りにいる人がどのようにして受け入れて理解していけるのかを、一人ひとりが考えることが先ほどの広域プラットフォームであると思う。余裕がなくなっている社会の中で、そこが課題になると感じた。

(委員) 区民ひろば富士見台のスローガンは「人と人が緩やかに繋がるプラットフォーム」だ。孤独や孤立を意識したわけではないが、幼児から高齢者までの全ての人を受け入れ、皆が仲良く、その中で自分の悩みを自分たちの中で解決していけたらという思いで運営をしている。子供が地域の小学校に入り、何かやろうと思ったが、いざやろうと思ったら友達が働いており、気づいたら1人になっていたという方が実は結構いる。そういう方に楽しんでもらえる行事を考えながら活動をしている。何となく寂しいと思ったスタートが孤独・孤立に繋がるということであれば、もっと色々なところでやっていくべきだと感じた。

(会長) 埼玉でもプラットフォームで子育てをテーマに勉強会をやっているが、出産のために女性が一度仕事を退いて、また戻ってくることの難しさや、子供を授かったことでキャリアが一度止まってしまうことへの不安感が語られた。嬉しいことだけれど不安があって、楽しいことだけれど、そこに差があるという難しさが議論された。

### 3 ひきこもり支援ハンドブックの策定について【資料2】

#### (事務局) 概要について説明

(会長) 社会福祉推進事業という位置づけで私も関わっているが、これは研究事業なので、厚労省が直接まとめたものではない。そうは言っても、この事業は政策に非常に大きな影響を与えるものになる。これがベースとなり、厚労省が何か正式なものを作るという可能性が非常に高い。6ヶ月以上というひきこもりの定義が大幅に変わることは間違いないだろう。どちらかという状態の定義はあるが、具体的にどんな支援をするのかが弱かったので、そういったところを目指す姿として書かれている。今までの報告書の影響もあると思うが、「自律」という言葉を、自らを律するという意味合いでは使っていないところに注目したい。後ほど意見交換したい。

### 4 今後の区の広報について【資料3、資料4】

#### (事務局) 概要について説明

(委員) 資料3「令和6年度ひきこもり相談窓口実績」で、窓口へのきっかけについて聞きたい。紹介 22.6%とあるが、紹介はどのような紹介が多いのか。支援者から紹介されるということか。非常に数字が高いので、紹介が効果的なのかと思った。

(相談員) 関係機関からの紹介もあるが、家族から言われてきたという方も紹介に入れており、母や姉・兄、あるいは知人から言われた方もいる。関係機関だと CSW や保健所、国民健康保険課から紹介された方もいらした。

(委員) 「こうすればうまくいく」という成功体験を語られても、それぞれ生活環境が違うので、しっくりこないことが多い。むしろ失敗体験を語られると、その人の人生観が見えてくるので親近感が湧く。

支援関係者は、「人と繋がりましょう」と言われることが多い。しかし、いじめられた経験のある人は、「繋がり」という言葉にアレルギー反応を起こすことがある。なぜなら不特定多数の人にいじめられた過去を思い出してしまうからだ。良かれと思っていることほど、善意で言ってしまうので、相談者を傷付けてしまう。やはり元気がないときでも、自然体になれる人が相談しやすいのではないかと思った。

(委員) 情報サイトの件で、画像で作っているため検索にかからないという問題がある。相談者の顔が見えないことも問題だと思っていて、墨田区はイラストで出しているが、その人の顔がイメージできるのは当事者にとって重要である。相談員のリスクもあるかもしれないが、相談員の顔がわかるとよい。また、動画や YouTube 等を多様化し、コンテンツをちりばめることもよいと思う。豊島区のキャラクターのななまるを活用しながら、もう少し工夫できればと思った。

(会長) ヒットしやすい作り方のアドバイスをいただいた。相談員の顔が見えるのは、当初から意識してきたと思うが、またそれを大事にしていきたい。先ほど委員がおっしゃった「繋がり」という言葉。だんだん義務のようになり、それが正しいもので、そうしなければならないとなると苦しくなる。便利な言葉だから、共通になればなるほど、それが固定化されていく。それがひきこもりの当事者からすると苦しくなるかもしれないという意識を持っておかなければならないと気づかされた。

(委員) 今会長から話を聞いてはっと思ったが、「ひきこもり」という言葉はもしかしたらきつすぎるのかもしれない。できるだけ人を呼びたいと思い、「ひきこもり」という強い言葉を使ったが、資料3を見ると新規相談者数も減ってきているし、言葉を変えた方が時代的にもよいのかと思った。

(事務局) この窓口を開設するときから、ひきこもりという言葉を入れるか入れないかは相当迷い、色々なご意見をいただき、まずは入れてやってみることになった。名前に出すことのメリットはやはりある。ただ今のご意見の通り、きつすぎるという方も当然いらして、今でも悩むところではあるので、ちょうどいい言葉はなかなか見つからないと実感している。

(会長) まずは窓口を明確化しようと名前を入れた。そうすると何か愛称を付けた方がよいのか。

(委員) 本人も家族も、「ひきこもりなのか」から始まり、「自分はひきこもりではない、だからそういうところには相談に行かない」という声がある。昨年豊島区の全戸配布の広報に、ひきこもりの並列で「生きづらさ」という言葉や、「あなたの生き方を応援します」という文を掲載したことで、本人の相談が増えたという実績があった。先ほど、厚労省のひきこもり支援ハンドブックでひきこもりの定義の話があったが、定義をつけるとそこからこぼれ落ちてしまう人が必ず生じる。本人や家族に向けられる相談員の眼差しが変わるだけで、相談窓口に行くとひきこもりとは書いてあるけれど、親身に話を聞いてくれるとか、何を言っても大丈夫な窓口だという、まさにそういう積み重ねになってくると思う。繋がり続けるという言葉ではなく、その人が声を上げたときにしっかり受け止めていけるということが、この豊島区の懐の深さではないかと思っていて、相談員の姿勢で変わっていけると思う。ひきこもりの裏に生きづらさというところも含めた窓口になっていけるとよい。

(会長) 幅広く受け止めていくことの大事さをお話いただいた。

(副会長) 関連して名称の事だが、やはり名前が出ていないと何の窓口かわからないので、周知するためには必要だという意見もある。私の大学でも障害学生支援室という名前の支援室がある。そこを学生に紹介したいが、それを紹介するとあなたは障害があるというニュアンスになってしまうから、名前はこうだけれど、実際は困っていることのサポートができる学生のための場所だと、補足の説明をつけるようにしている。紹介する時に言葉を少し添えるだけでも違うのではないか。先ほどお話いただいたような繋がる元気がないようなときでも、そういう補足の説明を皆で心がけていけるとよいと思った。

(委員) 最近診療の中でお会いした方が、「家族以外に話すのが主治医しかいないことに気付いて、まずいと思った」と仰った。最近ずっと家にいてひきこもりの状態だと仰る。こういう場面に出会った時、相談ができるところや居場所として活用できるところを紹介できるとよいと思う。相談対応してくれるのはどういう方か、活動内容はこんなことをしている、などできるだけ具体的に伝えたい。また、先ほどの豊島区のプラットフォームの表を見ていて、例として挙げられていたものをみると、とても良い内容だが、当事者には、仕事をしたいなどのはっきりした目標もなく、どうしたらよいかかわからないが、ただ、話を聞いてほしい、自分のことを理解してほしいという気持ちがある方も多くいらっしゃると思う。その気持ちに寄り添うことで、相談につながる心理的なハードルを下げるができる。当事者のペースを尊重する施策が大切だと思う。

(委員) 別件で来庁が15%程度あり、庁内連携でこの窓口を紹介しているのかと推測したが、色々なケースがあると思うので、お聞きしたい。

(相談員) 区役所4階の案内にひきこもり相談窓口の表示が出ているので、他の窓口からひきこもり相談窓口の表示を見て急に来られる方が13名いらした。

(委員) 区役所に来て、窓口の表示を目にして自然に来られたのは、良いことだ。もう一つ、国がひきこもり支援ハンドブックを出す中で、当事者に全く接していない人の中には、ひきこもりの状態をあまり良くない状態と考えて、社会に何とか戻さなければと勘違いされる方が一定数いる。ひきこもりという言葉が1人歩きしてしまい、自分はそうではないと思って、より外に出られなくなるとか、ハレーションが生じるのではないかと。そのあたりを考えた対応が必要なのではないか。私は弁護士として多重債務の問題を扱っているが、日本の制度では、破産は弁護士と相談しながら申立書を作れば、1年以内に債務から解放される仕組みだが、破産という言葉は嫌だと、絶対破産をしたくないと言う方がいる。言葉の持つ意味で嫌がっている。ひきこもりもそういう状態は悪いことではないと、ひきこもりは生きづらさを抱えた方と同じような意味だという社会的な空気を作る必要がある。国がこのような形で支援するのは、逆に言えばそういう方をなくしていこうと捉える危険性があることを、相談を担当する側の人間が考えておかなければならないと思った。

(会長) 今お話いただいたことは、専用の相談窓口があれば繋がるが、そうならない、そこに至らないご本

人の様子がある。それをはっきりさせることの辛さや抵抗感。先ほどの学生がセンターに行くと、自分は障害があると認めることになるから先生も紹介しにくいというこの辺りのところが相談に繋がることの難しさだと思う。

(委員) CSW の窓口では相談がはっきりしない、そもそも何で困っているかわからない、少し話を聞いてほしいという方もいる。逆にそういう話が入ってくるのが非常に大事だとも思っている。複雑、複合化する前にいかに相談に繋がるかが大事。課題を抱えたり、生きづらさを抱えた人たちの周りの人がその人に少し情報を教えてあげたり、気づいてあげたりするタイミングで繋がるのが非常に多い。自分で困っていることがはっきりする人は色々な相談に行けるからよいが、そこに行けない人たちはどうするかというと、今ひきこもりの統計を見ている、本人が気づいてというパターンもちろんあるが、周りから教えてもらったり、案内されてということもあるし、公的な機関でなく友達や知り合い、ちょっと気にかけて声をかけてくれる人がどれぐらい増えていくのか。そこが先ほど孤独・孤立をどう防ぐかというところに繋がってくるのではないかと皆の話を聞いて思った。改めて、ひきこもり支援という特別なものではなく、日々の住民や団体のみなさんの取り組みが孤独・孤立対策に繋がったり、ひきこもっている人やひきこもりがちな人に気づき、繋がる実感を持てるような広報を、ひきこもり状態の人や家族に情報を届けるだけでなく、周囲の人に知ってもらうことが、大事なのではないかと思う。

(委員) 民生委員として独居高齢者宅に実態調査に行ったとき、「あなたは孤独や孤立であってはいけないと思うのか」と聞かれた。「もう人と交わりたくない。色々な仕事をして色々なことを見てきたから、老後ぐらい少しゆっくりしたいので繋がりにたくない。僕は孤立でもなければ孤独でもない。何か困ったことがあれば民生委員や包括もあるし、どこかに投げかけることができるので、今の僕の状態を孤立だとか孤独だかと思って心配してくれなくていい。」とはっきり言われた。自分のことを孤独や孤立だと思っていない方は男性に多いと感じる。女性も1人が好きだという方は結構いる。ただ、何かあったときに助けてくれる人、連絡できる人だけは作っておいてほしいという方も伝えている。本人はひきこもりになるようなきっかけがあったわけだから、そこを自分でも考えていると思う。先ほどひきこもりという言葉はきつという話があったが、この協議会でネーミングを討論して、遠回しの言い方でなく、ひきこもりという言葉を使うことによって、そこに足を踏み入れることができる人たちがいると思う。

(委員) 私が関わっている方で、社会的には孤立していて、生活上の困難を抱えており、他者との交流が限定的で私以外の人とはほとんど交流しないが、多くの趣味を持って、楽しんで暮らしておられる。何を支援してほしいというよりも、ときにはぼやかたかったり、世間話がしたいだけだったりして、厳密に言えば地域包括支援センターの仕事ではないと言われかねないような案件ではあるが、こういう種別のつかない支援体制が、ひきこもりの支援が整っていく中で、形を成していくとよいと思った。

(委員) 話を聞いていて、ひきこもりという言葉の意味や、支援を考えさせられた。要は生きづらさを抱えていて困っているのであれば支援をさせていただき、生き方の支援なのではないかと思った。資料1でプラットフォームの話があったが、保健予防課で自殺・うつ病の対策委員会の事務局を担っ

ており、広報も課題にはなっている。全国的にも豊島区もそうだが、男性の自殺が多い。そして相談窓口を知らず、繋がっていない男性はやはり女性より多い。また他自治体では、タクシーに相談窓口のチラシを置いてみたり、飲み屋のコースターの裏に相談窓口を載せるという取り組みをしているところがある。やはり自殺との関連も深いし、孤独は自殺リスクファクターとしても挙げられているので、解決しなければならない課題だと思っている。相談実績に年齢や男女の内訳がないので、差し支えないようであれば、教えていただきたい。

(相談員) 今年には男性の方が多く、新規のみで言うと男性が7割ぐらいになると思う。

(会長) 全国的な推計の傾向だとだいぶ女性が伸びてきているが、元々は男性のひきこもりの方が多いと言えるので、豊島区も全体的にはそういう傾向がある。

(委員) 東京都もトータルの件数としてはだいぶ落ち着いてきているが、継続相談の割合は増えてきている。豊島区の延べ相談件数でメール相談の件数が多いところを拝見し、やはり継続的な相談をされている方や改めて相談したいと思われている方が増えているのかと思います。伴走型支援が具体化されているように感じた。東京都でも相談件数自体が増えており、かなりの伸び率になっているが、同じような傾向で継続相談の割合が多くなってきており、相談を継続できるような環境になっていると思うので、引き続きご尽力いただきたい。情報サイトについても、相談しやすいような形にするためには、どのような方が相談を受けているのかを見せていくことも非常に大事だと思う。一方でリスクもあり、支援者側がバーンアウトしたり、消耗してしまうようなことがない形で取り組んでいただきたい。東京都の新規事業で支援者支援の交流会をやっているなので、ぜひ参考にさせていただきたい。

(会長) 東京都は支援者支援を大事に、様々な分野でしていただいている。豊島区も参考にさせていただきたい。それでは議題3についてはここまでとし、各委員からのご意見、情報をいただくということで、ハンドブックのことも含めて意見交換をしていきたい。

## 5 各委員からのご意見・情報交換

(委員) 先ほど、コースターの裏を使った広報という話があったが、今、宮崎県内の家族会と支援グッズを作っている。トートバック、ペン、ウェットティッシュ、のぼり旗、パネル、タペストリーを、県の公式キャラクターを散りばめて作っている。ひきこもりという言葉が良いか悪いかは別として、やはり、認知をしてもらうことが大事で、色々なイベントで配布したり、県内にある団体にのぼりを渡したりしている。県の広報や区報にはほとんどの人が興味がなく、区のホームページもほとんど見ないので、グッズを作るのもありだと思う。豊島区でも共催という形でイベントができるので、そういう施策をうちながら反応を見ていくことも必要で、イベントや居場所とか、色々なものを組み合わせてやってみて、何が良かったのか、何が駄目だったのかを検証していけば、広がっていくのではないかと思う。

(会長) 先ほどの議論を少しまとめると、ひきこもりという言葉は色々な意味合いを持っていて、少し強いかもしれないけれど、知ってもらうという意味では、やはりあった方がよい。ただ対象はもっと広がっているため、広く捉えるというところをハンドブックと比べながら話があった。

(委員) ひきこもりの言葉にまつわるイメージがあると思う。私は広報としまのピンク色の広報は明るいイメージでとても気に入っている。ひきこもりは明るくなろうと言っているわけではなく、ただでさえ社会や地域に対して後ろめたい思いがある。繋がることへの恐れもある。でも、豊島区はこんなに明るく広報して、ウェルカムな感じがある。以前、東京都町田市がうちわを作り、そこに「あなたのタイミングでも大丈夫」という一言が入っていた。これは画期的だと思っており、その一言が押しつけがましくなく、でもなんか温かい。そういうイメージをもって、情報サイトやイベントも含めて新年度も豊島区の手で工夫していけるとよい。

(委員) 共感されやすい悩みは、他人に話しやすい。たとえば一人で抱え込んでしまうところがあるので、仕事が続くかどうかわからない。困りごとがあっても、どこまで相談していいのか、わからないなどは、周りに理解してもらえやすい。一方で社会人がピアノを学び直すのが難しいことは、他人に相談しづらいと思う。個人で運営されているピアノ教室は、女性の先生が多いので、成人男性お断りのところが多い。僕の場合、中学卒業するまで、女子からは「男のくせに何で私より弾けるの?」と嫉妬されて、男子からは「ピアノなんて女々しい」とからかわれた。その当時師事していた先生は、「男の子が音大に入るのは、相当覚悟がいる」と力説されていた。

(会長) 日本は男らしさや女らしさとか、昭和の時代によく言われていた。そういうジェンダーについての部分はだいぶ変わりつつあるが、まだそういう意味での生きづらさがあるという話だと思って聞いていた。

(委員) ハンドブックの中に、ひきこもりという言葉がひとり歩きしないよう、こんな生きづらさを抱えているということを入れ込んだらよいのではないか。自分が本に書いてあるひきこもりに当たるのかどうか考えるけれども、ひきこもりは幅広い概念であり、実はそこまで厳格に考えなくてもよくて、気軽に相談できるとか、そのようなことを書いておくと、言葉もひとり歩きがしにくくなるのではないかと思う。

(副会長) ハンドブックを改めて見ているが、支援のポイントを見ると畳み掛けるように書いてあるように見える。意思決定支援は行政でもやらなければならない、ハンドブックのようなものができるが、本人の意向確認ができない場合には、その意向を推測すると書いてあり、支援者が思い描く方に引っ張るということも起こりやすい。そうならないようにすることが必要だとは思いますが、このハンドブックの中で一番大事なものは、「このハンドブックに記載されている内容をもとに、対話を通して、より良い支援を実現していく」と記載があり、自分たちで考えて、ビジョンを見つけていくすり合わせが大事だと感じ、今日のこの会はまさにその場になっていると思った。私が実際に関わっている方を繋いでみようと思い、結局その日は行かないことになったが、また連絡したときに、「また勇気が溜まったら来てください」と言われた。この「勇気が溜まったら」という言葉がすごくよかった。行こうと思うまでの間に勇気がたまるというプロセスがあるとか、隙間にあ

るこの人のありように寄り添っていくことが必要だと感じた。繋がれない、声を上げられないでいるという、その狭間にいらっしゃる方、声が届きにくい方々のところにどう寄り添っていけるのか、狭間を考えていくということも大事だと思いながら話を伺っていた。

(委員) ひきこもりという言葉にやはり引っかかって、自分はひきこもりだった本人だから、どこに相談に行けばよいかわからないので、はっきりしておいた方がいいと思っていたが、支援する人の立場から考えると、パンフレットを渡して紹介するときに、ひきこもりと書いてあるとやはり厳しいのではないかと、渡しにくいのではないかと。支援する側の人も同じことが言えるのではないかと思う。

(委員) ひきこもりを前面に出していないところもある。今の話も本人にとってみればわかりやすい方が確かにいいが、紹介する側がそれを本人に伝えるのはかなり勇気がいるのかもしれないと思うと、なかなか難しく、これからも考えていきたい。

(会長) 何をやってくれるところなのかということは伝わらないといけなから、ひきこもりという言葉はやはり必要な気はするが、確かにそれを渡された方が自分はひきこもりだと思ったとき、先ほどの学生が障害者なのだと思うのと同じ葛藤がある。そのあたりが難しい。

(相談員) 実際に困る時があるため、そのときにどうしているのか話したい。本人は外に出たりしているのでひきこもっていないかと相談に来られる方もいるが、本人のニーズがどこにあるのかで窓口は変わってくるので、そこを本人と話してみてもらえないかと家族や支援者に伝えている。そこが狭間にあたるのであれば、お手伝いできる窓口であることを伝えつつ、医療分野であれば保健所や各種窓口、仕事であればくらし・しごと相談支援センターに繋いでいる。

(会長) 資料3を見て、メール相談が増えていたり、継続相談者が増えているので、やはり今の豊島区の形はしっかりとした結果を出していると思う。その良いところをしっかりと残しながら、幅広く窓口につながるよう、生きづらさ等のメッセージをどう上手に出していくか、丁寧に説明いただくことになるかと思うが。

(副会長) 広報としまから繋がった人が多かったのは3年度と5年度で、全戸配布した年はやはり効果があった。そして新規の人も多かった。落ち着いてきたというよりはその影響があるかもしれない。窓口の話に掲載し、継続的に働きかけるということも大事なことだと思った。改善点について、資料4でXやブログをもう少し充実させていきたいということがあったが、忙しい業務の中で忘れずにやっていくのは大変だと思う。どういった所にどういう場所があって、どういう人がいてということがもう少しわかるとよいという話も出ているので、街の中の人に記事を書いていただき、溜まったものを順番にアップするだけという皆の力で記事を作ることもいいのかもしれない。

(会長) やらなければならない業務は山のようにあるが、それを分かち合っって良いものを作っていければよい。例えば区民の声とかの形がよい。ぜひ可能なところでやっていけたら。支援者支援という視点からも大事な点である。

(副会長) 私達がネタをお伝えすることも協力できることなのではないかと思っている。

(委員) ひきこもりも孤独・孤立も予防という言葉がどうしても引っかかってしまう。悪いことをしているように感じてしまう。豊島区はぜひ、悪いから孤独・孤立させないとか、こんな強い言葉を言わないでほしい。社会から孤立することで自分を守る人もいる。そういう意味で色々な声を、その人のタイミングで受け止められる豊島区であってほしいと思った。できないことを探すのではなく、その人の持っている良いところを探せる、ストレングス視点を持っていきたいと思っている。悩み相談でも、そこで本人が頑張っていることを見つけてもらえるような窓口になってほしいし、別に悩みを探さなくてもよいと感じている。

(委員) 今日も様々な視点からのご意見をいただき、また一步二歩、行政として進んでいけると活力も湧いた。支援者同士の繋がりで支援者のエンパワーメントをつけていくということも重要なことだと改めて思った。そういう意味での官民連携ができれば、豊島区の力になるのではないかと思った。また、ひきこもりというネーミングのことも、長年ご意見をいただいているが、広報としまのようなタッチで様々なところで宣伝ができれば、ひきこもりの裏側にあるニュアンスも拾って、様々な方が相談に来ていただける、繋がれるということができていくと思う。また、民生委員や育成委員等、様々な支援をされている方にこのひきこもり窓口を正確に知っていただくことでの広がりもあるのかと、本人や家族へのPRだけではなく、周りの方々へのPRも必要なのかと思った。

(会長) 皆さんの思いを集約して最後の言葉をいただけたのではないかと思う。これをもって、令和6年度第2回ひきこもり支援協議会を終了する。

閉会